

特別報告 【シリーズ解体】

谷口雅宣 三代目総裁 によって失われしめられたもの その3 — 神様の取り替え 「住吉大神」 から 「造化の三神」 へ (2)

谷口雅春先生畢生の御悲願 龍宮住吉本宮落慶なる

前号で、龍宮住吉本宮建立の意義に関する谷口雅春先生の御文章を紹介しましたが、なかでも神殿建立の重要な意義について、先生は更に詳しく次のお示し下さいました。

「わたしは近いうちに、九州別格本山の八十万坪の聖地に、護国の神霊住吉大神の神殿を建立する準備のために移住する。

宇宙創造の大神は、神示に、「われに神殿は不要である」と仰せられているのであります。

絶対者にまします大神にとつては神殿は不要であるが、住吉大神と名を示して個別的にあらわれ給うた人格神については又別の相対的意義があるのであります。人間にとつては礼拝精神の対象として、信仰心の集中の一点として、崇



＜龍宮住吉本宮＞ 住吉大神の御神霊が主神としてお鎮まりになっていたお宮



＜鎮護国家出龍宮頭齋殿＞ 住吉大神御出御の扉を開く社であった龍宮住吉本宮の拝殿(上下2枚グラフ(新聞)より引用)



鎮座祭で祝詞を奏上される谷口雅春先生(「生長の家」誌昭和54年2月号より引用)

敬の心を散乱せしめないためには神殿が必要なのであります。

しかし神殿に奉斎する御神体は偶像ではないのであって、「護国の神剣」をもって御神体とするのであります(『神の真義とその理解』)

こうして谷口雅春先生ご夫妻は、昭和50年1月13日、81歳の御年齢のとき住吉大神の御頭齋、龍宮住吉本宮建立の為に、東京から長崎へと出立されたのです。

谷口雅春先生は、龍宮住吉本宮の御造宮が開始されると、住吉大神を讃うる御歌を毎年お詠みになりました。その中から二首ご紹介いたします。

昭和五十三年 年頭の御歌 “日本浄化”
住吉の聖霊あまねく日の本を
蔽ひつくして浄め給はん

この年秋の住吉大神御頭齋へ向け、乾坤一擲の力を絞られて臨まれる尊師の力漲るお歌です。

昭和五十四年 御題詠進歌 “丘”
—— 龍宮住吉本宮落慶をことほぎて
丘の上に鳥居建ちたり陽を受けて
燃ゆるが如く稜威輝く

かくて昭和53年11月21日、谷口雅春先生御自ら齋主として、龍宮住吉本宮・鎮護国家出龍宮頭齋殿新殿祭・鎮座祭を執り行われ、日本浄化、宇宙浄化を熱禱されて龍宮の大神である住吉大神を勧請されたのです。

このみ歌には御祭りを果たされ、龍宮の光り輝くゆたかなる世界の現成を感じ取られた尊師の、清々しい喜びがあふれています。

谷口先生が「生長の家」誌「明窓浄机」欄で、住吉大神の幽齋・頭齋の願いを記されてから、実に二十年後のことでありました。

住吉大神への敬慕の情深き

谷口雅春先生の御心



「月始め感謝祭」において住吉大神様にご挨拶される谷口雅春先生ご夫妻(「光を見つめ」より引用)

総本山に移住された谷口雅春先生が、とりわけ喜びとされたのが、龍宮住吉本宮における「月始め感謝祭」でありました。

「私がこのお祭りに出席いたしておりますのは、必ず月始めには住吉大神にご挨拶に参りたい、過去の月日の御恵み、お護りを感謝申しあげたい、そしてこの月も御神徳をいただきたい、そういう意味でお参りさせていただいているわけでありました。(中略)

住吉大神様はこの愛の神の体現者として、そして全ての罪を浄めてなくしてしまおうところの、そういう働きをもって顕われてこられたのであって、法則の神様というよりは、人格の神様でありますから、私はその住吉大神にいたい！おめにかかりたい！という感じがするのです。それは…本当に、お父さん！お母さん！とかいうような気持なのです」昭和54年6月1日「月始め感謝祭におけるお言葉」(「白鳩」誌昭和54年10月号)

谷口雅春先生にとつて住吉大神は、「お父さん、お母さん」と慕う御存在だったのです。

「住吉大神」の御名を お呼びする重大な意義とその心

ところで、谷口雅春先生は、祈るにあたって

は正しき神様に祈り、その神のお名前を切実な思いをもって呼び、神様と自己が一体となって祈ることが、如何に大切であるかということ、繰り返しお説き下さいました。そのいくつかをご紹介します。

「常に「スミヨシノオオミカミ」と念じて、この神と一体となり、「住吉の世界」を現象の世界に持ち来して、此処を住吉の極楽世界と化すべきである。「スミヨシノオオミカミ」と念ずるとき、あなたの全存在に、生命を新生させ賦活する新しき神のいのち流れ入ってあなたの全存在が新しく健康に甦る、無理な緊張がなくなり、心は明るさにやすらぎ、平和の安心感とがあなたの全存在に行き届く」(新版『生活の智慧365章』)

「神を父に喩えてみますならば、父は「お父さん」と呼ばなくとも父の守りは一家庭内に満ちており、万事万端完全に満ち備えておいて下さるのが父であり、子供が「お父さん」と呼んで抱きつくと、そこに人格的交渉が顕れるのであります。祈りには実相を顕現する祈りと人格的交渉の祈りとがあるのです」(新編『生命の實相』第30巻 宗教問答篇)

谷口雅春先生は、中学生や高校生にも神様のお名前をお呼びして祈るようご指導され、祈りの言葉を示されました。

“住吉大神に祈ることば”

「神さま、あなたが太陽のエネルギーとして輝いていらつしやるときわたし達は神さまを天照大御神とお名前を称えるの

であります。神さまは無限であり、無限の善きお働きをなさるので、その時のお働きによってわれわれは神さまのお名前を称えるのであります。

住吉大神と申上げるときには、神さまが、この世の乱れや、さわぎを鎮めて住み吉くして、この世界を住みよい世界にするお働きをして下さる時に、そのようにお呼び申上げるのであります。

住吉大神さま、どうぞ日本の国を浄めて、この国を天国のようにして下さいませ。ありがとうございます」(『理想世界』誌 ジュニア版昭和53年3月号「七つの祈り」)

天之御中主神(本源神)は住吉大神(応化神)として顕現して初めて救いを具体化する

生長の家を導き給い、谷口雅春先生が父のように母のように慕われた住吉大神を、現總裁、雅宣氏は徹底的に除外、追放していききました。代表的なものを列記すると、

- ・聖典『神の真義とその理解』の実質絶版(住吉大神ご顕齋の意義が説かれていた聖典。信徒の眼に触れさせないために最初に実質絶版に処せられたと言われている)
- ・住吉大神の御言葉「神示祭」の廃止
- ・住吉大神「宇宙浄化の祈り」の廃止
- ・住吉大神の神霊符「の下附中止
- ・聖使命感謝奉納祭の祝詞から「住吉大神」を削除

そして最後の仕上げが、令和2年4月7日付、住吉大神から、「造化の三神」へご祭神変更通達だったので。ご祭神を変更すれば「救い」が生まれ

なくなることが、『白鳩』誌昭和48年3月号の「十四日の箴言」に、はつきりと記されています。

「超越的絶対者は、それは「絶対者」であるが故に、われらに語りかけて対話を交えることはあり得ない。

それ故に絶対者の慈悲を体現したところの相対的に顕現する人格神、又は天使、又は菩薩、又は教祖があらわれなければ絶対者はその救済を具体化することは出来ない。救済を具体化することが出来ないような神は、神と称されるにしてもハタラクに於ては神ではない。

神が救済を完うし得る本當の神となり得るためには、絶対者が相対的人格神としてあらわれて救済の御業を現実になさなければならぬ。

即ち……天之御中主神が住吉大神として顕現しなければならぬし、宇宙普遍の神が、ある教祖として顕現しなければならぬ。……神の具体的人格的慈悲の完成は応身の教祖となって顕われることによつて完成する」

谷口雅宣氏の宗教的大罪と私たちの使命

超越的絶対者すなわち宇宙の本源神は、人間の救いには直接かわからず、救済を具体化するの応化神であり、天使であり、菩薩であり、教祖であると、谷口雅春先生はお説き下さっています。

救済を具体化する応化神すなわち住吉大神を追放し、教祖である谷口雅春先生をも追放した現教団に、神癒や救いが起こらなくなるのは当然です。

更に『神の真義とその理解』に、「絶対者にまします大神にとつては神殿は不要である」と示されているとおり、絶対者にまします大神すなわち造化の三神(天之御中主大神・高御産巢日神・神産巢日神)は、社殿などに勝手に祀ってはならないのです。

にもかかわらず雅宣總裁は、住吉大神を主神から脇神に押し込めるため「造化の三神」を利用してという、まさに神を恐れぬ所業をやつてのけたのです。

こうして現教団の信徒の人たちは、三代目の所業に従う教団執行部の指示によつて、祀つてはならない神様を自宅の神棚に祀らされているのです。

谷口雅宣總裁の誤った教義によつて、信仰の喜びを失っている多くの教団信徒の方々に救うことも、谷口雅春先生の正しい生長の家のみ教えに導かれた私たちの使命でありましょう。

一人でも多くの現教団の信徒の皆様へ、「令和2年4月7日付で現教団はご祭神を取り替え、全く異質の宗教団体になつたのです」とお伝え下さい。

(引用の原文は一部旧漢字、歴史的仮名遣い) 現教団は實相額を「七重塔」「造化の三神社殿」で覆いかくしている。これは許してはならない所業である。



【令和2年4月7日付通達による設置イメージ】(谷口雅春先生を学会より引用)